
たった二文字のラブレター

佐野幸弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった二文字のラブレター

【Nコード】

N5087N

【作者名】

佐野幸弘

【あらすじ】

乾いた空気、穴の開いたジグソーパズル、アシユビーズのリーフバッグ。

犬の視点からみた人間の理不尽と、伝えきれない思いを描いた恋愛小説。

ご主人様はずっと眠っている。

どうしたんだろう、いつもなら外が明るくなる頃には目覚まし時計が鳴って、僕はそれを合図にご主人様のを起こすのに。

僕はペンをかたどった目覚まし時計を前に首をかしげる。

長針が律儀に時を刻み、一つ数えるごとに等間隔に歩を進めるのを見てみぬ振りをするように、短針はどっしりと構え動こうとしない。壊れているわけではなさそうだった。ご主人様が目覚ましをセツトし忘れるのは初めてのことだった。

僕は寝息ひとつ立てないご主人様の周りを、足音をさせないよう気をつけながらくると一周する。マットレスが僕の体重を心地よくはじき返す。大地が弾んでいるような、雲に乗っているような不思議な感覚だ。

顔をなめてみようかな、いたずら心が顔をのぞかせる。

駄目だ、ご主人さまはこの頃ずっと疲れてたんだ、今日くらい寝坊したっていいはずだ。起きるまで待つてよう、それからたくさんお話をしよう。

僕がご主人さまに初めて会ったのは2年前のことらしい。そのときのことはほとんど記憶にない。ただぼんやりと抱き上げられたときの温かさだけを覚えている。

僕にはたくさんの兄妹がいた。小さなケージの中で、自分と似た匂いに囲まれ時々自分に似た顔に押しつぶされそうになった。

兄弟たちは生まれてすぐに別々の家にもらわれていった。鈍い銀色の今にも壊れそうなケージが一日ごとに広くなり、伸びをしても転がっても平気になるまで1ヶ月もかからなかったらしい。僕は体が小さく病気がちでいつまでたっても貰い手がなく厄介者だったみたいだ。

ご主人様は子どもの頃から犬が好きで、一人ケージに取り残された僕のうわさを聞いたときすぐにでも飼いたかったけれど、一人暮らしだとあまり構うことが出来なくて寂しい思いさせるからと諦めていたらしい。

でも、兄妹がいなくなり一人で寝てばかりいる、白く丸っこいモチのような僕の姿を見て、勘違いした誰かに食べられないうちにと考えて飼うことを決心したのだと言っていた。ご主人様は命の恩人だ。おかげで僕は神棚に祭られることもきな粉をまぶされることもなくここにいます。

アパートは小さなペットなら大丈夫ということアピールポイントにしていたらしいけれど、犬は小さいと鳴き声がうるさいということ、大家さんは相当嫌がったらしい。ご主人様はしつけをしっかりとやって絶対に他に迷惑をかけないことを約束することで、何とか僕がこの部屋に住めるように頼み込んでくれたらしい。

小さかった頃の僕はそんな事情なんて顔についたよだれ跡ほども気にせず、しょっちゅう鳴いたり、トイレ以外の場所でおしっこをしたりして迷惑をかけた。

ご主人様はそんな僕を怒鳴ったりせずに、一つ一つ優しくこの部屋で暮らすためのルールを教えてくれた。大きな声で騒いではいけない、トイレは決められた場所です、壁とか床をつめでひっかいたりいけなくない、お風呂で体を洗った後はきちんとふいてもらうまではしやぎまわっちゃいけない、特に濡れた体を部屋の中で思い切り震わせ天井にまで水滴を飛ばすことは絶対にしてはいけない。全部ご主人様が教えてくれたことだ。

ちゃんと決まりごとを守っていい子にしていたおかげで、大家さんの僕を見る野生のカワウソのような厳しい面持ちも随分やわらかくなった。一人暮らしじゃあるくにあまりものもでないだろうというては、夕食のあまりを僕に持ってきてくれるし、室内犬だからって狭いとこばつかじゃ病気になる、庭にある小さな丸いプールに入れてくれることもある。

そのプールは大家さんの娘がまだ生まれたばかりの頃に買ったもので、結局一回も使う機会がなく倉庫にしまわれていたのだと大家さんは言っていた。大家さんの作るご飯は少し塩辛い。それでも僕はその味が嫌いではなかった。

表を走る車の音に僕はふと目覚めた。カーテンから光が差し込みまぶたのうえから視覚を刺激する。もう昼を幾分か過ぎていているようだ。

僕はマットレスに足がついたただけのベットに前足をかけ、ご主人様の顔を覗き込む。相変わらずご主人様は目をつぶったままで、全く起きる気配がない。

大学は大丈夫なのかな、本屋に行かなくていいのかな。

僕は鼻先が触れそうになるくらい顔を近づける。ふんわりと髪の毛が鼻腔をくすぐる。ご主人様の匂いだ。そのなかにかすかに嗅ぎなれない異質な分子が混じっている。新しいトリートメントでも香水でもないこの懐かしい匂いはなんだろう。記憶の糸を懸命にたどってみても、離れすぎた糸電話のようにぶつりとなぎ目は途切れていた。

僕は無心でご主人様を見つめる。

ご主人様はいつも頑張りすぎていた。勉強も、仕事も、周りが心配になるほど真面目で一生懸命で、毎日そんなに頑張って本当に大丈夫なのだろうかと思っていた。だから、たまには寝坊したっていいんはずだ。ご主人様は急ぎすぎている。たまには陽だまりでただまどろむような、そんな時間があっている。ご主人様をせきたてるものは僕がテトラポットになって受け止めよう。

携帯電話がなったらそつと音の聞こえないところまで持っていてしまおう。本当に大切なことなら一回くらい出なくても必ずまたかかってくる。

そつだ、今日はあらゆる音からこの部屋を守ろう。僕はそう決意すると、普段白い丸テーブルの上にある携帯電話を取ろうと、端に

足をかけ覗き込んだ。

テーブルの上はガランとしていた。真ん中に携帯電話がすました様子で陣取り、そのほかにはボールペン一本ない。携帯を取るために、後ろ足を伸ばせば体をぐいっと持ち上げる。角度をかえると白い光沢のない表面に、携帯に押しつぶされるようにへばりつく一枚の便箋が目に入った。

便箋の白さはテーブルの色合いに溶けこみ、気を抜くとその姿を失ってしまいそうだった。昨日僕が寝てから勉強してたかもしれない、そんなことを考えながら、真っ赤な携帯電話に足を伸ばす。爪先をクマのゆいぐるみのストラップにひっかけようと試みるが、僕の身長ではなかなか届かない。ジャンプして身体全体を使って引き寄せる。気流に乗り空高く舞うチョウゲンボウがウサギを捕まえる姿をイメージする。勢いをつけ狙いを定め、後ろ足を蹴りあげる。

短く切りそろえられた爪がストラップを的確に捉え、そこまでしかイメージを膨らませていなかった僕と一緒に、ラグのうえに滑り落ちた。ガタンという音とともに一枚の紙がハラリと宙を舞い、音もなくラグに着地する。

紙は爪をたてたせいかわ、すこし折れ曲がっていた。それよりも、今の騒ぎで起こしてしまったのでは。そつと振り向く。自分は錆びついたちようつがいたとも言うような繊細さで、首と上半身を連動させながら。

ベットではご主人様が同じ姿勢で横たわっている。良かった、起こさずにすんだみたいだ。僕はストラップをくわえ、つやつやとした林檎の赤みを持つ携帯電話を、ビーズクッションの奥に押し込んだ。これでご主人様が振動に驚いて飛び起きる心配はなくなった。

それにしてもこの便箋はなんだろう。僕は視線を戻す。表にはびっしりと文字が書き込まれ、その様子は雪原に無数にそびえる系杉を思わせた。これがレポートというものだろうか。僕は指定席の丸座布団に伏せ、真っ黒な線の波を食い入るように見つめた。

僕はあまり頭は良くないけれど、ほんの少しだけ文字を読むこと

が出来る。

ご主人様が教えてくれた。

ご主人様は読書が大好きで、よく僕をひぎのうえに抱えたまま何時間も読みふけた。本の虫、子ども時代はそういわれてからかわれてたと話してくれた。小さい頃の僕にはそれがとても退屈な時間で、よく本をかじったりしてご主人様を困らせていた。

そんな僕にご主人様は赤ちゃんに語りかけるように、ゆっくりと根気強く本を読み聞かせてくれた。「コハルには絵本のほうがわかりやすいかな」そういつて自分の読書を中断して、僕のために絵本を読んでくれることもあった。

「コハルが読書家だから、図書館に行くためのバックがトートバックなつたよ」と笑っていた。

「これは犬つて読むんだよ。い・ぬ、コハルのお友達だよ、わかるかな」

デフォルメされた友人の姿をほほえましく思いながら、僕は尻尾をパタパタ動かし、何度もうなずく。ご主人様は僕がそうするととても喜んでくれた。それに答えようと、僕は自分から絵本を開くこともあった。

図書館の司書さんは、毎回噛みあとがついた本を返されて迷惑だったかもしれない。それとも赤ん坊が本を味わうにはそうするしかないことを既に知っているかもしれない。

「コハルは文学少年だね」ご主人様は訳知り顔で文字を追いかける僕にそういつては微笑みかけてくれた。それが嬉しくて僕は更に一生懸命本を読んだ。

「これはなんて読むかな」たまに冗談半分で問いかけるご主人様を驚かせようと、必死に勉強した。ひぎの上のレッスンはじまつて半年ほど経つ頃には、絵本ならある程度意味が理解できるようになった。

「コハルはすごいね、本当に読んでるみたい。じゃあ、コハルにとつておきのお話を教えちゃおうかな」僕がきよんとしている

ご主人様は一冊の絵本を取り出した。

「これはね、私がちっちゃかった頃、お父さんが読んでくれた絵本なんだ」細くて白い指が表紙をめくる。絵本を開くその横顔は向こう側が透けて見えるほど透明だった。

「主人公の男の子はね、お家の事情で両親と一緒に家にいられなくて、大好きなおばあちゃんと二人で住んでいたの。ある日おばあちゃんが病気になるって、男の子は両親に引き取られることになったんだけど、男の子はおばあちゃんと離れるのが嫌で、勝手に病気になるって自分と暮らせなくなつたおばあちゃんのことを怒つたの。男の子は、病院にお見舞いにも行かずにつつと新しいお家で、病気が治るのを待ってたんだ、また一緒に暮らせると思ってたんだよ。きつと周りの大人もおばあちゃんはずく治るって言うってたんじゃないかな。でも一週間たつても一ヶ月たつても、おばあちゃんは男の子を迎えに来なかつたの。男の子が次におばあさんを見たのはお葬式の時きだつたんだ。おばあちゃんは病院のベットですつと男の子に会いたがつてたけど、自分の寝たきりになつてる姿を見て男の子が心配するといけないと思つて、自分ひとりで病氣とたたかつたんだ。でもね本当は男の子に来てほしかつたんだよ、毎日看護婦さんに寝てる間に小さな男の子がこなかつたかつて聞いてたの。男の子は悲しくて毎日泣いたけど、でも死んだ人にはもう会えないことを知つて、もし今度同じことになったら絶対大好きだつてことを伝えようつて決意するんだ。おばあちゃんに伝えられなかつた分も精一杯」

ご主人様は目に涙を浮かべながら、僕に語りかけた。

「私はこのお話読んでもらつてた時、この男の子はバカだなんて思つてたの、自分の口からちゃんと言わないと気持ちには伝わらないのにつて。でも、私にこの話をしてくれたお父さんが事故で死んじゃつて、気づいたんだ。私も男の子と一緒に、結局お父さんに好きだよつて伝えられなかつたの」

なだらかな頬を涙がつたう。

僕はそれを舌でぬぐつた。

「ありがとう、コハル」ご主人様はペンを手にとって、ノートに大きく文字を書いた。

「見て、これが『す』これが『き』。好きって字はこう書くんだよ。分かるかな」そのとき僕は好きの意味がなんとなくしかわからなくて、首をかしげた。

「好きってというのはこういうことだよ」ご主人様はそんな考えを読み取っていたかのように僕をそっと抱き上げ、柔らかな手のひらで頭をなでてくれた。

あの日から僕はご主人様に教えてもらった二文字を書くために隠れて練習をした。横棒に縦棒を十字に交差させ、左側に小さな丸がつけた文字が『す』、横棒2本にななめの棒2本なのが『き』。形を思い出しながらを何度も繰り返し床を爪でなぞる。

読書の時間は内容そっこのだけで、この二文字をおいかけた。

たまに真っ白な紙が手の届く場所にあると、マジックを口にくわえこっそり書いてみたりもした。ご主人様は「コハルお絵かきしたの、すごいね」と誉めてくれるときもあったけど、「駄目じゃない、いたずらしちゃ」と怒るときもある。

ご主人様は決して理由もなくしかりつける人ではなかった。

きつと僕は何枚も大事なものを駄目にしたのだと思う。

今も昔も、僕にとってそれを見分けるのは難しかった。画家が気に入らない絵をキャンパスごと捨ててしまうように、うまく書くことのできないもどかしさを紙にぶつける僕はどうしようもなく惨めだった。ご主人様を喜んでもらおうとしていることが現実には迷惑となり、心の天秤をアクアマリンを溶かしたような現実味のない水面に傾ける。

そういつたことが幾度かあり、もう紙に書くことは止めたけれど、いつかご主人様に気持ちを伝えるために、僕は記憶の奥底の細かな砂粒のなかに鍵をかけしまいいこんだ。

カーテンの隙間から差し込む光が少しずつ形をかえ、その先端がベッドにくちばしのように伸びる。アスファルトの照り返しが天井をほのかにオレンジに染め上げる。

まぶしいといけない。

僕は乾燥機にかけすぎたワンピースのすそのように乱雑にはだけたカーテンを口を使って丁寧に整える。文字を書いているおかげか、僕の口はご主人様の箸より器用に物をつかむことが出来た。

新聞の勧誘よりもしつこい日光の進入を食い止めると、窓のさつしに黒のマジックがちょこんと行儀よく収まっているのが視界に入った。そんなところで膝をかかえてどうしたんだい。このマジックが女の子で僕がご主人様が読んでいる本の主人公なら、きっと素晴らしいながらそつと手をとるだろう。それくらいどこか所在なさげにマジックはそこにいた。誰かに連れ出してもらおうのを心待ちにしているようにも見えた。

ご主人様は片付けの名人で、部屋はたくさんものに溢れていても一つとして居場所のないものはなかった。申し訳なさそうにたずんでいるこのマジックは、テーブルの上から転がり落ちたものかもしれない。

僕は鼻先をさっしに差込みマジックを端まで押し込んでから、舌で浮かせ前歯でその体を包み込んだ。ご主人様が豆をつかむよりスムーズな動きだ。僕はささやかな戦利品をテーブル脇のラグの上に運んだ。このところずっとマジックには触らないようにしていたので、その固く無機質な感触は久しぶりだった。

一仕事終えた僕は、丸座布団に体を伏せた。

視界には新しい居場所で再び居心地が悪そうにしているマジックを捉えている。やっぱりご主人様が片付けるのと僕がするのは、どこか勝手が違うらしい。

部屋はどこか荒涼とした空気に包まれていた。砂嵐とサボテンとバーボンが似合いそうな、乾いた空気だ。

窓側の部屋の隅には、作りかけのジグソーパズルが放置されている。ジグソーパズルは1,000ピースはある大型のもので、この小さな部屋に確固たる地位を築いている。まだ枠組みと少しの組み合わせが出来ているだけで、いったい何をモチーフにしたものなのかはわからない。ご主人様はコハルには完成するまで秘密だといっていた。

僕は何処に視点を定めるわけでもなく、ぼんやりとジグソーパズルのピースを眺めた。互いに手をとりあうようにびたりと寄り添い、その姿はどこか誇らしげに見える。彼らには初めから生涯の伴侶が決められている。隣の隣はどれほど近くてもその距離はけっして縮まることはない。かみ合うピースとはどれだけ大喧嘩をしても離れることはできない。そういうふうに出来ている。それが彼らにとつて幸運なことなのか、僕には想像もつかなかった。けれども、真ん中にぽっかりと大穴をあけたままのジグソーパズルはとての間が抜けている。ご主人さんが目を覚ましたら、パジャマのすそを少しだけ引っ張ってジグソーパズルを作ってもらおう。カチリと小気味良くピースのはまる音がして、つながりのない世界が色を帯びていく。僕はその光景が大好きだ。

深まった秋の陽気に思考が溶け込む。僕の体は無意識のうちにつもの練習を繰り返していた。ラグを傷つけないように爪の背中をそっと押し付け、その白い繊維の一本一本が文字の形を記憶するよう何度もなぞる。

僕の前足は口ほど起用ではない。

同じ部分をなぞろうとしてもどうしても線がずれてしまって、文字が浮かび上がるような状態にすることは不可能だった。

僕のご主人様がしてくれた話を思い返した。人と人は僕とは違って自分の考えを言葉で伝えることが出来るし、直接言うのが恥ずかしかつたなら文字にすることも出来る。それなのにどうして自分の思いを素直に相手に伝えられないんだらう。

僕のご主人様に数えきれないほど本を読んでもらい、その度に物

語に登場するたくさんの人々の人生に思いをはせた。彼らは大抵とても不器用で、僕からしたら考えられないほど臆病だった。そしてどこか日常を嫌っていた。僕ならきつとこうするのに、もし僕が人間ならことあるごとにそう口を挟んでご主人様を困らせていたと思う。

そして、ご主人様はこういうだろう「私もコハルがいうとおりだと思う。でもね、本当に自分がこの立場になったらやっぱり登場人物と同じことをするかもしれない。私はきつともつと不器用で、臆病だから」

僕がまだ自分の名前を覚えていなかった頃、この家にはご主人様の友達がよく来ていた。もう名前も顔も虫食いの写真のようになるところどころしか思い出せない、空き箱の中に詰め込んだきれいな小石のような意味のない記憶だ。

薄茶色の瞳とそれよりも明るい赤みがあった髪、日曜の昼下がりのような気だるい甘さを持つ香水が印象的な女性だった。

彼女は来たいときに来て、帰りたいときに帰っていった。ご主人様はこのわがままな友達の行動に口を尖らせて抗議していたけれど、本心では嬉しかったんだと思う。その証拠に友達が好きだったアシユビーズのリーフバッグがキッチンに彩りを加え、その愛らしいパツケージに包まれたアールグレイやアッサムティーの香りは乾きがちな部屋の空気に潤いと異国情緒を添えていた。

部屋には今でも彼女が座るための丸座布団が主人の帰りを待ちわびている。

使い終わった外国製のアプリコットジャムの小瓶に詰め込まれたリーフバッグも、ネコの顔をかたどった丸座布団も彼女が現れる前にはなかったものだ。

僕の記憶には音とにおいが刻み込まれている。紅茶を入れるために沸かしたお湯がコトコトとフラミンゴの首のような注し口を持つケトルを揺らし、蒸気はこの閉じられた世界全体を躍らせる。リー

フバッグに沸騰したお湯が触れた瞬間、空間は一秒とたたず模様替えをすませ、アールグレイなら青をふんだんに用いた知性と冷たさを感じさせる世界に、アッサムなら黄色を基調とした落ち着いた世界に塗り替えていく。ティーカップとソーサーが重ねられる音が前衛的なメロディーとなり、ミルクをかき混ぜるティースプーンは目をまわした回数だけカレイドスコープのように景色を変容させていく。

めまぐるしく移り変わる世界で、僕は迷子にならないようにご主人様のおいと、自分自身のおいを交互に探す。僕の嗅覚は嵐に呑まれた難破船の羅針盤のようにくるくると方向をかえ、けれども結局はあるべき位置を見つけ出す。その匂いはむせかえるようなアールグレイの香りより遙かにちっぽけでささやかだ。

けれども、僕はまだ迷子になることなくここにいる。

打ち捨てられた子犬みたいに途方にくれているこの部屋で、僕はまだ自分の場所を見失わずにいる。

ご主人様と彼女の会話が耳の裏に響き渡る。甲高く、人懐っこい小枝。僕はその声が嫌いではなかった。ご主人様とは違う、飾り気の多い手が僕をなでる。

香水の匂いが鼻をうつ。

もう解けてなくなる氷の最後のひとかけらほど小さく遠くなったそれが、僕に名前もない頃のかすかな残り香を思い出させた。僕はともすると、季節をまき戻そうとたくらむその香りを振り切ろうと丸座布団に耳の付け根までうずめた。長年使っているせいでごわごわと毛羽立った繊維には、僕とご主人様以外の誰もいなかった。

そうだ、彼女が来なくなった日から僕はここに座り続けている。そのことを確かめるため、おなかの奥にまで行き渡るようゆっくりと息を吸い込む。紅茶の香りも香水のおいもない、ただ動物の持つぬくもりだけが流れ込んできた。

僕は絡まりあったコンセントのような頭の中で、もう一度ご主人

様の言っていたことを解きほぐした。

男の子は最後まで自分の思いをおばあちゃんに伝えることが出来なかった。それなら伝わらない思いはどこに行くのだろうか。成長した男の子の胸の奥は、まだそのときの思いのための小部屋があり、ほこりと同居しているのかもしれない。

偉い人がテレビで言っているのを聞いたことがある。物事には始まりと終わり、入り口と出口がある。雨が川になって水道を通って蛇口から流れ出るように、流した涙が誰かに届くまで管理する人たちはいないのだろうか。もし誰もそこに責任を持たないなら、思いがどこかに置き去りにされたまま地面に飲み込まれてしまう。

雨は雨のまま休むことはできない。海水は雨と呼ぶにはあまりにしょっぱすぎる。

僕はたまに玄関先で会う、水道のメーターを真剣な顔を見つめるおじさんのことを考えた。洗いすぎて色落ちした青い作業着を着込み、にじむ汗を気にするそぶりもみせずしばらく無言で数字を追ったかと思うと、急に電源が入ったように手元のハンディーを操作して、色々難しい数字の書いてある紙をご主人様に渡して、深々と礼をして帰っていく。夏も冬も同じ作業着を着込んで、寸分のくりもなく一定のリズムで紙を打ち出し、一言も口を開くことなくもたら道を小走りにかけて行く。

あの人が水道と涙を管理してくれたらいいのにな。
だってあの人はいつも急がしそうだし、何より無口だ。

それに思いは郵便配達の人にお願ひするにはあまりにも形が変わりすぎる。水道管のなかを曲がり、くねりながらいつくるかも知れない出口を待ち続ける。それくらいでちょうどいい。

口に含んだだけでミネラルウォーターのラベルが鮮明に描きだされる人がいるみたいに、きつとその程度のことでも伝わる人には伝わるんだ。そうじゃなかったら、世界は安物のポプリのようないで溢れかえってしまう。そうなかったからじゃ遅いんだ。

少なくともこの部屋に満ちた残り香は僕の小さな体には収まりき

りそうになかった。

ビートバンを両手に水面に顔をつける要領で丸座布団に突っ伏した僕の鼻腔を、アルコールに墨を混ぜ込んだようなマジックのおいがノックした。まるで、迷子が母親を求めて泣いているような悲痛なおいだった。

僕は寝転んだまま顔をあげることもせず、誰もいませんよと返事をしようと思った。

でもその行為はあまりに人を馬鹿にしすぎている。僕はそんなことを考えてしまった自分を眠気とともに振り払った。そこに紙のにおいが割り込んだ。

僕は目だけをうえに出す。傍から見たら僕は草むらから獲物を狙う肉食獣に見えるだろう。切れ長のイネ科の植物の穂先に身を潜めるように、鼻先を座布団にもぐりこませたまま、においのもとをたどる。視界に飛び込んだできたのは折り重なった紙の山だった。それは海岸線に打ち寄せる波しぶきにも見えた。

どうして気づかなかったのだろう。ベッドの向かい側にあるチェスト前に突如出来た仮設ピラミッドを、僕は数時間も見逃していた。僕が黒くつややかな薄い皮膚とピンと張り詰めた形のいい耳を持った番犬だったなら、職務怠慢といわれても仕方なかった。

僕はトムソングゼルのもど仏に狙いをつけるチーターになりきって、そつとその白い山脈ににじりよった。もちろん相手は逃げることも、反転して鋭い角で威嚇することもしない。ただ、部屋はアフリカを思わせるほど乾いていた。

この家に来たときにはまだ悠々ぐくり抜けられたローテーブルに何回か頭をぶつけながらたどり着いた先には、さつき見たものと似た便箋がうずたかくつまれていた。その紙はどこか陰鬱で、文字の波は重油に侵食された海面を思わせた。大事なもののかな、汚したら怒られるだろうか。僕は一瞬触れることためらった。しかし、あらゆるものにきちんと役割どおりの場所を与えるご主人様の几帳

面な性格を思い出し、積み重ねられた紙が崩れないよう一枚抜き取った。フローリングのうえが彼らの与えられた場所なら、好奇心に身を任せたほうが正しいことに思えた。

便箋はさっきテーブルに置かれていたものと同じものだった。書いてある内容も似ているように感じたけれど、僕に読めるような文字はほとんどなかった。で確かかなことは言えなかった。ところどころに書き直したり訂正した跡があり、二重線をひかれた文字は遮断機に閉じ込められ前にも後ろにも進めなくなった車を思い起こさせた。

インクのおいは新しく、昨日僕が寝てから書かれたものであるようだった。

しばらくそうしていると、僕の心の中に表現しづらい違和感が沸き起こる。

ご主人様はどうしてこんなにたくさんの方の文章をわざわざ手書きしたんだろ。ご主人様は大学の課題を仕上げるときはいつもパソコンを使っている。ご主人様は不器用で、字もあまりうまくないらしい。僕はそのまるっこくて筆圧のつよい文字が好きだけど、ご主人様はよくそうこぼしては頬をふくらませていた。ペンを思いきり握る癖のせいで10分も字を書いていると腕に力が入らなくなると僕に愚痴をいい、手書きのレポートが出たら世界の終わりが来たかのように落ち込んだ。

僕の知らないところで新しい課題が出たのだろうか。考えにくいことだった。ご主人様は大学の勉強しているときはいつだって僕にその内容について話してくれた。それはさすがに本を読んでくれるときのような語りかける口調ではなく、どこか独り言めいた確認のための会話だったけれど、僕はご主人様が今年に入ってからどんな勉強をしていたか全部暗記している。

「フィリップ・アリエスの子ども誕生にみる近代的子ども観」「作られた伝統とは - 現代スコットランド文化の起源 -」「後期フランドル派の特色について」「ハイドン エステルハージソナタにみ

るバロック時代のパトロンと音楽家の関係性……」

「ご主人様が大学で一番真面目な学生だったとしたら、僕は間違いなく二番目に真面目な学生だ。」

それにしても、大学のレポートでないとしたら何だろう。

手紙かな。いや、手紙にしては文章がびっしり書かれすぎている。それに誰かを喜ばせるために書く手紙なら、こんな面白みのない便箋よりももっと可愛い便箋を選ぶはずだ。

僕は古物商がうさんくさい持ち込みの茶碗を値踏みするように、様々な角度から見回した。秒針が時間を刻むのと同じリズムで首を傾けていくと、僕の首が三時を指したときあることに気づいた。

紙の表面にらくだのごぶのような凸凹があるのだ。

それは砂漠に点在するオアシスさながら、白く平らな地表にアクセントを加えていた。どうやったらこんな風になるのだろうか。よく観察すると、その部分は文字がにじんでいた。僕は反射的に天井を見上げる。雨漏りでもしていたのかと考えたけれど、天井が濡れていたような形跡はなかった。それにこの部屋は一階だ。窓から雨が吹き込んだのだろうか。それもどうやら違うようだった。この部屋にはベッドの横の出窓とベランダに出るための大窓しかない。そのどちらもアコヤ貝の口よりも固く閉ざされている。

それに横から覗き込まなければ気づかないほどのかすかな変化が、無遠慮な雨粒によってもたらされたものだと僕にはどうしても思えなかった。

それはもつと繊細で、消え入りそうなおいを漂わせていた。

足元に打ち寄せる白と黒のまだらな波を前に僕は途方にくれていた。

一枚だけそつと抜き取り、それをジグソーパズルのピースをはめ込むようにあるべき場所返す。それが当初の予定だった。しかし、そんなスケジュールは僕のきまぐれな尻尾によって変更を余儀なくされた。無意識のうちに尻尾は箒としての役割を果たし、僕の疑問

ごと小高い紙の山を払いのけていた。尻尾は箒としての自分の才能に満足したのかすぐに動くのをやめ、そこには僕と後悔がペアで取り残されていた。

今から状態を復元することは、同じ味の料理をもう一度作ることより難しそうだった。

素直に謝ろう。そんなことを考えていると、まだらな紙の下に真っ白な紙が何枚もあるのが視界に入った。どうやら、紙の山はマーブルとバニラの二段構成になっていたようだった。

傍らにマジック、そして大量に積み重ねられた無地のキャンパス。練習の成果を試すときがきたように思えた。

ご主人様には後からうんと謝ろう。そしてそれと同じくらい好きだと伝えよう。

僕はマジックを持ってくると、片足で端をおさえ口でふたを取った。あたりにアルコールの粒子がいつぱいに広がり、僕はその鮮烈な香りにむせかえりそうになった。久しぶりの刺激だった。鼻がじんじんとひりつき、感覚がにぶくなっていくのがわかる。悪くない気分だった。

昔たまたまついていた教養番組で書道の特集があった。

まだその頃は膝の上のレッスンは始まる前で、僕にとってそれはとても退屈な番組だった。

画面の中の老人は、雪のように白くなった長髪を後ろで一つ結びにし、目を異様になまで見開き身じろぎせずただすずに向かい正座をしていた。まるで生きたまま心を抜き取られて、彫刻になっってしまったかのように老人は息遣いすら体の奥底にしまいこんでいた。

時間だけが無為に過ぎ去っていった。

あの頃の僕には老人がただそこに座っているだけの映像が全く理解できなかった。今でもほとんど理解できていないと思う。

それでもただ一つ、想像することがある。老人は怖かったのかも

しれない。

一枚の紙に自分のすべてを伝えきり、そしてその作品が老人のすべてを代弁する。老人の人生、仕事観や若いときにした大恋愛、子ども時代の思い出、顔に刻まれたしわの一本一本にいたるまでのすべてが1?にも満たない同じ顔の和紙に飲み込まれ、自分の中から消えていく。そのことが恐ろしくて恐ろしくてたまらなかったのだと思う。

伝えるという事は何かを忘れることなのだろうか。だから皆伝えることに臆病なのだろうか。

もし伝えることが忘れることと同じなら、僕はヤジロベエのように2つの思いにぴんと引つ張られ、背筋を伸ばし立ち尽くすことしかできないだろう。

僕は電源の入っていないテレビに、記憶の中の老人の姿を鮮明に描き出す。

ほとんど白髪になった長髪を薄手の白いてぬぐいで後ろに結び、鼻の下とあごには髪と同じく白くなったひげを蓄えていた。やや日に焼けたかさついた肌には深々としたしわがある。職人を思わせる深い藍色の作務衣を着込み、書道家というよりは刀匠や陶芸家といった風貌をしていた。

老人は外骨格の生物を思わせるぎこちなさですずりを前に硬直していた。その乾いた肌にすべての意識が集中し、老人の体の芯が空洞になっていくのが画面越しに伝わる。白木の筆は固く熱を持たない指先にはさまれ、その痛みに耐えかねるようにかすかに震えている。老人の姿は蟹そのものだった。手ははさみになり筆を断ち切らんばかりにつよく掴み、二本の腕は大きく外側に弧を描いている。その姿は酷く不恰好で、とても書道の大家には見えない。老人は脱皮を待っているようにも見えた。古くなった体を脱ぎ捨てるため、ただひたすらきっかけを待っているのではないか。

人はどれだけ年をとっても伝えることに臆病な生き物なのだろうか。

それとも伝えることで過去になり、自分の体の外の出来事となり、やがて形を変え忘れてしまうことが悲しいのだろうか。

もしかしたら、老人はその両方を受け止めたうえで、忘れていくものたちに敬意を払い、その使い古された体をこわばらせているのかもしれなかった。年をとると忘れられないことも、忘れたいことも多くなりすぎる。

ふいに老人の手が動いた。

なめらかな動きだった。

筆を墨がなみなみと満たされたすずりにゆつくりと運び、筆が墨をその身いつぱいを含むと勢いよく紙の上を滑らせた。よどみなく、どこか悲しい動きだった。水面におちた一滴の雫がその波紋を広げるように、白い紙が黒く塗り替えられていく。

老人の手が動き出してから、その動作を終えるまで五秒もかからなかった。わずかの時間のうちに、何も持たないこと以外何も持たなかった白い一枚の紙に年輪が刻まれ、言葉が与えられ、記憶が残された。以前と変わらず白さを誇示する余白も、あきらかに変質していた。老人は後悔とも歓喜ともつかない表情でその場に同じ姿勢で座っている。顔のしわは少しだけ薄くみえた。

僕は引つ張り出した新品の紙を前に背筋を伸ばした。なぜかそうしなければならぬ気がした。

太陽の光が流れていく時間を几帳面なほどの正確さで伝える。僕はおかすかにのどの渴きを覚えた。朝起きてからまだ何も口にしていないことに気づく。

キッチンに行けば冷蔵庫の横に僕専用の水のみ場が備えつけられている。透明なガラス瓶が上下さかさまになり、ふたには銀色の管がついている。先がボール状になっていて持ち上げると隙間から水が溢れる。一度に多く飲みたいときは舌で押し上げるように飲み、あまり喉が渴いていないときはボールを回転させるようになめる。

ご主人様はいつも新鮮な水をピンいれ、銀色のボールも丁寧に磨

いてくれている。

この不思議な水のみ場がはじめてやってきた日、僕にはこれが何のためにあるものなのかわからず、ご主人様が水を入れてくれても遠巻きに眺めるだけで、近づくこともしなかった。ご主人様は困った顔を今でも思い出すことが出来る。

「コハルはこれが怖いのかな、よくみると象みたいだもんね」たしかに銀色ににぶく輝く管は象の鼻のようにも見えた。ご主人様はしり込みする僕を横目に、うつぶせになるとぺろぺろと飲み口をなめた。舌でボール押し上げ、水が口の端をつたいフローリングをぬらす。僕は恐る恐る近づき、同じようになめようとするが、それでもなかなか決心がつかなかった。

ご主人様はそんな僕をせかさず、うつぶせになったまま冷蔵庫に手を伸ばしてアプリコットのジャムを取り出す。ふたをあけると刺激のある甘みが鼻先をくすぐった。

「コハルにはちょっと大人の味かも知れないけど」ご主人様はそういいながら、まず自分がそれを指ですくいあげ口にした。次に同じように僕の口に指を差し出し、僕がそれをなめようすると、指を引っ込め飲み口につけた。

僕はアプリコットの香りに魅了され、さっきまでの警戒心が嘘だったかのように自然に口をつけた。

今でもご主人様はたまにいたずらでボールにジャムや蜂蜜が塗る。僕はそれを楽しみにしている。

その味は僕に赤ん坊だったときのことを思い出させる。あの頃は何にも知らなかったけど、何も知らないでいることも出来た。ご主人様がうつぶせになり一緒に水のみ場でジャムをなめていたあの時、僕がご主人様と同じ視線でいられた最後の日だったかもしれない。

喉の乾きも、お腹のすきもまだ我慢できるものだった。ご主人様起きてからでも遅くはない。そう思い、神経を紙にむけた。

紙の端は少し折れ曲がりしめっている。慎重に抜き出したつもり

だったけれど、口ではどうしても人間の手と同じようには行かない。前足ではなおさらだ。

僕は一番きれいな状態のものを選び、他を少し距離のあるところにどけた。次がある、いくらでもかわりがある、そう考えると結局線の一本ですらまともに書けない気がした。この紙に何百回、何千回と繰り返し返した二文字を書く。普通の人間からしたらとてもちつぱけなことだろう。けれど、僕にとってはノーベル賞をとるよりも、一人でエベレストを登頂するよりも困難な偉業だ。

マジックをくわえ、姿勢を整える。

ふいにテレビの老人の姿が頭をよぎった。僕はそれを振り払うようにぶるぶると左右に頭を激しく動かす。僕は忘れるために言葉を書くわけじゃない。伝えるために書くのだ。

徐々に硬くなつていく手足に抗い、口を動かす。

目線と地面が平行になるまで首をかたむける。

口の中が膜が出来そうなほど乾き、何かの拍子に音を立てて体ごと崩れてしまう感覚に陥る。緊張しているのだろうか。何に。僕はどうしてこれほど自分が取り乱しているのか理解できなかった。ご主人様がいないとき部屋で一人あきずに練習していたとき、こんな気持ちになつたことは一度もなかった。マジックをくわえる奥歯に力が入る。僕は自分でも気づかないうちに僕はあの老人と同じ外骨格の生物になつていた。違ふのは筆とマジック、手と口。ひよつとしたら僕と彼との違いはそれだけなのかもしれない。いや、僕とあの老人との間の相違点はもう一つあった。彼にはかわいた肌があったが、僕はまだそれを持っていない。そう思うと歯にかけていた圧力が消え去り、マジックは地球に引っ張られ黒く短い線だけを残し、ラグのうえを転がった。

そうだ、僕は犬で脱皮することは出来ない。あの老人も同じだ。みんな脱皮することなく昔に髪の毛を引っ張られながら成長する。

僕とご主人様はトカゲとラクダほど違わないし、楓と老人ほど同じでもなかった。そのことが僕の心を軽くした。

僕は失敗した紙を新しいものに取り替えると、ラグに寝そべっているマジックをくわえなおした。口のなかはもう乾いていない。背筋はぴんと伸びている。そっとマジックを紙の上に躍らせる。紙の端から端まで届く横線が出来上がる。少し長すぎた。

「バランスが悪いけど味があるね」ご主人様の笑顔が思い浮かぶ。今度は縦線だ。二文字目も書けるようにあまり長くならないようにスペースを取りながら、細心の注意を払いながらそっとマジックを滑らせる。僕は十字に重なった二本の直線を俯瞰する。まだ下には十分な余白がある。二本の線はわずかにぶれているけれど、いまままで練習を重ねた中でも会心の出来だった。

次が一番の難関だ。

僕は一度マジックをラグのうえに置き、下で口の周りをペロリとなめた。一口だけ水がほしいとも思った。

再びマジックをとる。先が紙に食い込みしつかりとフローリングの硬さが脳に伝わるのを確認してから、つぶれたねじ山をドライバ―でまわすように静かに円を描いていく。円の始まりと終わりがなくなるまで一分はかかったと思う。勢いそのままに「き」にとりかかる。「き」は「す」に比べて形が複雑で覚えにくい。

僕は間違えないよう記憶の糸をたどる。ご主人様の優しい声、物心つく前からピアノをやっていたという白く細い指先。そのつややかで透明な爪が指す文字を影送りをするように紙にうつす。

書いているうちに涙がこみあげてきた。それが何の涙か僕には分からなかった。

悲しみでも苦痛でもなく、僕はただ涙を流した。なにかのテレビで人間以外涙はながせないとやっていたが、あれは嘘だ。僕人間ではない、けれど涙は海に流れ込む雨のようにとめどなく流れ落ちていく。テレビの言っていることが嘘でないなら、そのとき僕は悲しみの涙を心の奥で流すことしかできない。

インターホンがけたたましくなり響いたのは、僕の思いが形を持

つてすぐのことだった。インターホンは3、4回鳴り、少し間をおいてからガチャンと新聞受けにものが差し込まれた音がした。その間、ご主人様は身じろぎ一つせず眠りについていた。

僕はすぐにもご主人様を起こしたい思いで一杯だった。後ろ足で体を支え、ベッドの枠組みに前足をかける。深々とかぶった花柄の黄色いタオルケットに無意識に前足が伸びる。

ご主人様は紙に書かれたこの二文字を見て何というだろう。驚きの声を上げるだろうか、それとも喜びの声だろうか。僕の頭を陽光のようにほのかに温かく懐かしい手でそつとなで、字を理解していることを誉めてくれるかもしれない。そのあとで少しだけ部屋を勝手に汚したことを怒るかもしれない。それでもきつとご主人様は笑顔で僕のことを抱きしめてくれるだろう。

僕は絵本の男の子より馬鹿だけれど、少しだけ勇敢だ。

僕は何とか自分で自制心のネクタイを締めなおし、指定席の丸座布団に体を預ける。目の前にはお世辞にも上手だとはいえない二文字が、小さなレポート用紙に一杯に誇らしげにしている。ところどころ線が曲がり、にじんでいる。「す」の小さな丸はぎりぎりのところで十字に接することなく、はずれた輪投げの輪のように、どこか照れた表情をしている。「き」は斜めに書くことを意識するあまり、滑ってしりもちをついたスキーヤーのようにのけぞっている。下手どころか、知らない人間が見れば宝の地図だと考えるかもしれない。

だけど、僕は知っている。

言葉は伝えたい人だけに伝わればいい。そうやって言葉は生まれたんだ。そして僕の言葉はご主人様だけに伝わればいい。

僕は前足をテーブルの下に投げ出し、ゆつくりとまぶたを閉じた。心臓の鼓動が空気を震わせるのがわかる。体はまだ空にはなっていない。人は誰も忘れていく生き物なんだろう。そして僕も忘れていく。そんな当たり前前のご主人様が、ようやく線を結び始める。伝

えられない思っただけが庭先に打ち捨てられた自転車のように少しづつさび付いていく。

僕はご主人様を読んでくれた詩の話の思っ出した。

海を泳ぐ魚はすべて渡せなかった手紙が姿を変えたものだという、不思議で悲しい詩のことを。

広大な海は伝えられなかった思っに満ちている。魚は口をパクパクと必死に動かし、やがて諦める。僕は大海原に取り残され泳ぎ続けるしかない魚のために涙を流した。はつきりとした悲しみの涙だった。日差しは水面だけを申し訳程度に覆い、彼らは暗く冷たい塩水の中を追い立てられるように進む。行く手には広大な海があり、後ろにも広大な海がある。

時に群れ、時に孤独に。

声も出せず、ラブレター一枚書くことのできない彼らの世界のために僕は泣いた。

彼らにはヒレしかないが、僕には器用な口とご主人様譲りの不器用な前足がある。ラブレターも渡すことが出来る。

僕たちには魚にはない未来がある。

時間はまだたくさんある、あせることは何もない。

今日から毎日好きだと言おう。毎日ご主人様のいいところをひとつずつ紙に書こう。僕がいる、そのことを何度だって伝えよう。僕はいつまでも一緒にいられない。僕はご主人様と同じ目線で歩くことは出来ない。だから僕は声の続く限り思っを伝えよう。何年後かひよっとしたら明日。ご主人様と同じ目線で歩く相手が見つかったら、僕は誰よりも喜んで誰よりもその相手を好きになろう。

あの日、ご主人様と同じ位置から同じものを見上げた最後の日から、ずっともやになって胸の奥を足の腱を、毛の一本一本を振るわせ続けた何かはタンポポの綿毛のように風に乗り、もう何処にもその後姿をみることは出来ない。

伝えることは忘れること。

テレビの老人はジグソーパズルの無くしたワンピースをどうやっ

て埋めたのだろう。ぽつかりと明いたその場所は、残りの部分が完成していればそれで強く手に入れたくなる。長く生きること、一枚の絵画になっていたジグソーパズルがぼろぼろと崩れ落ち、もうどうにもならなくなっても、きつとそれでもあの老人は伸びた背筋ですずりに向かうだろうか。

僕はほとんど完成図の予想が出来ないつくりかけの部屋の隅のジグソーパズルを思い浮かべた。足元には小さな箱にぎっしりと詰めこまれた様々な形のピースが、海賊の財宝のようにカーテン越しの柔らかな光を反射させていた。

西日がカーテンのわずかな隙間から差し込んだ。表の電柱が影になってベッドにのしかかる。どこまでも深い影に飲み込まれたご主人様の寝顔はとても穏やかだった。

通りを走り回る子どもたちの声が気味の悪いほど透明なガラス窓をたたき、残響となりやがて薄いクリーム色をした壁に消えていった。

どこかでクラクションが鳴り、車がバツクする音が聞こえた。

いくつもの足音が世界をゆらし、それでも靴は耐え難い静けさにうちひしがれている。

僕の口は十分にうるおっていたけれど、喉は乾いていた。

小さく息を吸い込むとアプリコットの酸味が耳まで広がり、ぱさついた毛先から抜けていった。

僕は夢を見た。いつぱいのアプリコットジャムが塗られた銀のボウルが僕になめられるのを待っていた。ご主人様はくるぶしほどまであるラグに座り、右手に愛用のマグカップを左手に小説を持っていた。ご主人様の真向かいに誰かがいるが、僕からはそれが誰か確認することが出来なかった。

いつしか通りからは子どもたちの声も、持ち主のわからない足音も消えていた。それはどこまでも静かで、満たされた世界だった。

(後書き)

急いで仕上げたので誤字・脱字等見受けられるかと思いますがご容赦のほどを。

あと感想いただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5087n/>

たった二文字のラブレター

2010年10月11日01時49分発行